



トロントはシルクロード

伊倉光彦

たった今、拙宅の前の歩道をヘジャープとよばれるヴェールを頭からまとったイスラム系の女性が通り過ぎていった。今は3月、外は雪である。私の住むカナダ・トロント市は、11月から4月までの半年が冬、あとの半年を春、夏、秋が急ぎ足で過ぎていく。人口250万人のこの都市のもうひとつの“自慢”は、人種の多様性だ。詳しい統計は差別の観点から存在しないが、たとえば、私の研究室には現在、中国人3人、日本人2人、英国人2人、中国系カナダ人2人、インド人1人、ルーマニア人1人、英国系カナダ人1人、イスラム系カナダ人1人がいる。このほかにも過去に、ウクライナ系カナダ人、ベトナム系カナダ人、ハンガリー人、オーストラリア人、アメリカ人などがいた。それぞれに個性があり、文化の違いを感じさせてくれるが、みな優秀である。私は、トロントは現代に存在するシルクロードだと思っている。

シルクロードとよばれる中央アジアの一带は、かつて西と東の文明が入り混じる、世界中で一番活気のある場所だった。古代中国の都、長安(現西安)では、ソグド人(イラン系民族)が商人として漢民族と盛んに交流をもっていたし、西域における交易の要所に位置していた楼蘭とよばれるオアシス都市には、インド系民族の言語による文書や、ペルシャ文明に由来する壁画などが見いだし



写真1 トロントのダウンタウン・フロント地区の風景
CNタワーとその右横に見えるスカイドームがこの町のアイコンだ。手前はカナダ大陸横断鉄道。(筆者撮影)

れている。仏教がインドから中国を経て日本に伝わったのも、シルクロードの活発な物流および情報伝達機能の賜物であるといっても過言ではなからう。もちろん、物資はラクダで運ばれ、情報は人から人へ伝わったのであるから、今から思うと気が遠くなるようなスローモーションであるが、当時としては、比類なく素早く物質と情報が行き来した場所であった。

そして、そこには最新の文明があった。たとえば、紀元前のオアシス都市にはすでに、ガンダーラ美術、中国美術、イスラム、ペルシャ様デザインなどの繊細華麗な装飾を施した玉製品、黄金器、ガラス製品、鏡、漆器、陶器などが存在した。そこにはこれらの豪華な調度品を使って生活していた裕福な民がいたはずだし、その食文化は、畜産や漁業、農耕によって支えられ、果物も豊富で葡萄酒などの嗜好品も楽しんでいたらしい。タクラマカン砂漠にはシルクロードが栄えた当時、ロプノール湖とよばれる塩湖が存在し、魚介類が豊富に採れたという。当時、水のあるところにはオアシス都市が生まれ、文化が開いていた。森本哲郎氏の言葉を借りれば、まさしく「道は文明の血管であり、町は文明の結晶」なのである。言うまでもなく、アメリカもカナダも影も形もなかった、はるか昔のことである。

数千年の歳月は、北米の地に膨大な人と富をもたらし、その土地を人類の文明に少なからぬ影響を及ぼす地域に変貌させ、逆に、シルクロードとよばれる地域の大半を砂漠化し、人を寄せつけない荒涼とした辺境にしてしまった。そして、私の住むトロント市はここ1世紀のあいだに北米でも有数の大都市となり、その町は人種のるつぼとよばれ、モザイク文化が花を咲かせている。さまざまな国から集まってきた人々が、固有の文化や習慣を継承しつつ共存している。私には、その様子が遠い昔のシルクロードの有様と重なって映るのである。古代のオアシス都市にも、きっとバイリンガル(中国語、インド系またはイラン系言語)の人々がかなりの数いて、中国系の人々は西域のはるか彼方の異文化に興味深げに接し、ペルシャ系の人々は東洋の食べ物に舌鼓を打ってい

たにちがいない。

私は北米に移り住んで18年目である。そして、いつの間にか中途半端ではあるが日・英のバイリンガルになってしまった。カナダは英語とフランス語が共通語であるが、トロントでは、街のいたるところに中国語、ハンダ語のサインが目につく。この国は第2外国語に寛容で、政府広報でも必要があれば中国語で中国系の新聞に載せたりする。日本語の週刊新聞にも選挙や税金に関する広報などを見かける。こういうことはアメリカではまずない。

それでは、こんな多民族都市に住む日本人科学者の生活とはいったいどのようなものか？ ちょっと紹介してみよう。まず、毎朝の出勤は30分ほどのドライブであるが、私の愛車はもちろん日本車である。何をにおいても日本車は信頼がおける。極寒の冬のハイウエーで故障でも起こされたらたまらないから、これはゆずれない。ラボには8時過ぎに到着し、まず大学病院のスターバックスでコーヒーを買う。ここでアメリカ文化の恩恵にあずかるわけだ。私がトル・アメリカノを飲みながらつかの間の安息の時間を過ごしていると、中国人のテクニシャン2人が9時過ぎにやってきて仕事を始める。学生やポストドクが現われるのは、それから1時間以上もしてからである(これは万国共通であろうか?)。私の秘書はギリシャ系カナダ人で、東洋文化に関心があり、大学で働く前は台湾で1年暮らしたこともある。

昼はときどき近くのレストラン街へ出かける。大学は中華街からも近く、さまざまな国の味が楽しめる。なんといっても人気があるのは、安くて早い中華パンの店である。ここのホット・アンド・ソー・スープは格別である。イタリアのサンドイッチの店も悪くない。来客があるときは、少し気取ってマレーシア料理の店「マタハリ」に案内する。ここのサテー(焼鳥に似ているが、牛、豚、鳥、えび、ほたて何でもあり)とナッツ入りチキン照り焼きは定番である。学生食堂のような日本レストラン「こんにちは」も人気である。ラボのみんながよく出かける店は「サラダ・キング」である。このレストランはヘルシーフードの店ではなく実はタイ料理の店で、ここの南国風のゴールデンカレーはココナッツミルクとスパイスがうまく利いていて絶品である。私は、カレーと一緒に出てくる大盛りのお米を初めて見たとき、粉雪か



写真2 トロントの繁華街ブロード通りの風景
さまざまな人種が行き来する。(筆者撮影)

と錯覚した。それほどふんわりと盛られていて、いかにもおいしそうなのである。また、この店のイスラムフードは文明の融合を舌で味わわせてくれる。何だか食べ物のお話に終始してしまっていたが、これがトロントなのである。そして、週末にはよく、郊外にある中国料理店の密集地帯(おもに香港系中国人の移民の町)に出かけて、日本でいうところの飲茶(一般に広東語でディム・サムとよぶ)を楽しむ。シュウマイ類を中心に100種類以上の小皿メニューの中から1人数皿ずつ選び、家族みなどで分け合うが、どんなに食べても1人あたり1,000円分も食べきれない。こうしてお腹もふところも大満足で店を出ると、いつも幸せな気分になる。そして、遠い昔シルクロードの町でも、こんな思いで他民族のなかで暮らしていた人がいるのではないかと、西域の地に思いをはせるのである。

伊倉光彦

略歴：1986年 北海道大学にて理学博士号取得、1988～1991年 米国国立衛生研究所(NIH)、1991年よりトロント大学・オンタリオ癌研究所、現在、トロント大学医学部生物物理研究科教授、および、オンタリオ癌研究所情報伝達生物学研究部門長、2004年 カナダ政府研究教授号。

E-mail : mikura@uhnres.utoronto.ca 研究室ホームページ : <http://nmr.uhnres.utoronto.ca/ikura>

私のブログ

<http://blog.goo.ne.jp/mikura2005/>

